様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：６２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2019
課題番号：２６７８０３６７

研究課題名（和文）子どもの視点に立った養育とアタッチメントの発達：母親の視線解析に基づく縦断検討

研究課題名（英文）Maternal parenting and infant's attachment:Maternal focus on infant's mental states

研究代表者
篠原　郁子（SHINOHARA, Ikuko）

国立教育政策研究所・生徒指導・進路指導研究センター・主任研究官

研究者番号：３０５１２４４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：乳幼児期の子どもが養育者との間に安定したアタッチメントを形成するために、どのような特徴を持った養育が行われることが肯定的影響を持ちうるのかを検討することを目的に研究を行った。
本研究では、養育の特徴として乳児の心的状態に目を向けて読み取る傾向に着目した。この傾向に，乳児の行動を見る際の視覚的情報探索行動の特徴や，母親自身のアタッチメントがどのように関連しているのかを検討した。また，少人数を対象としたものではあるが，子どものアタッチメントの安定性との関連を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの研究から、乳児の心的状態を適切に読み取ることは、安定したアタッチメントの発達に重要だと考えられてきた。しかし、養育者が乳児の何をどのように「見る」ことが、乳児の行動の背景にある心的状態に思いを巡らせ、それを読み取ることにつながることになるかは十分に検討されていない。本研究は、養育者および成人の視覚的情報探索の特徴や，養育者自身のアタッチメント（内的作業モデル）に着目して、乳児の心的状態を読み取る傾向との関連を検討している点に学術的意義があると考える。

研究成果の概要（英文）：This study focused on maternal view on infant's mental states.Several studies have reported that maternal sensitive view on child's feeling and thoughts positively related to child's security of attachment.
This study investigated some factors that would relate to maternal reports about infant's internal states.As such factors, adult's visual attention when they watch infant's video stimuli and maternal attachment style(Internal Working Model) was analyzed.
The relation among maternal view on infant's mental state and later infant's security of attachment was investigated with small mother-infant sample.

研究分野：発達心理学

キーワード：発達心理学　親子関係　アタッチメント　乳児期　mind-mindedness

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

アタッチメントとは子どもが養育者との間に築く情緒的絆であり（Bowlby,1969），その安定性は長期的に子どもの健やかな社会情緒的発達と関連することからも重視されている。安定したアタッチメントの発達の予測因として，第一に養育者の敏感性（Ainsworth et al.,1978）が注目されてきた。しかし，多数の研究結果のメタ分析からは，実際には敏感性が仮定されていたほど大きな予測力を持たないことが指摘されている（De Wolff & van Ijzendoorn,1997）。このため，安定したアタッチメントの予測因について検討が進む中，「子どもの視点に立つ」という養育者の特徴が重視されている。

「子どもの視点に立つ」という特徴に関して，元来，敏感性は，子どもの状態の適切な理解（認知）と，子どもの状態に適切に応じること（行動）の双方に触れた概念であったと考えられる。双方はともに重要であるものの，より精緻な整理と検討が進み，複数の研究者が前者，すなわち，養育者が子どもの視点に立って，子どもが何をどのように感じて行動しているのかを理解しようとする認知的姿勢に着目している（詳細は篠原（2015））。そして，例えば，子どもなりの感情や動機を考えて受容する姿勢である「Insightfulness（洞察性）」や，乳児を意図や感情を持つ一人の人間であるとみなす傾向である「mind-mindedness（MM）」といった養育者の特徴に関する概念が提案され，測定による実証研究も行われている。それらの研究によると，洞察性や MM は子どもの安定型アタッチメントを予測することが確認され（Oppenheim et al.,2001;Meins et al.,2001），養育者が子どもの心的状態に目を向ける姿勢を持つことの重要性が注目されている。

しかしながら，特に発達早期の乳児の心的状態を理解することは，決して容易ではない。言語や他の伝達スキルも発達途上の乳児と大人のやりとりは非対称的で（Rogoff,1990），大人側が積極的に乳児の感情や意図の存在を推測する必要があると考えられる。これまでに筆者は，母親達に乳児のビデオ刺激を呈示し，ビデオから乳児の考えや感情を報告してもらう実験を行った。すると，全く同じ乳児の行動に対して，母親が乳児の心的状態として報告する量や内容は様々に異なるものであった（篠原，2006）。乳児の心的状態は乳児の行動等による表出によって伝達されるというよりも，それを見る者によって想像的に解釈され，帰属されていると考えられる結果であった。さらに筆者は，その後の研究により，母親が乳児の心的状態を豊かに想像して読み込む姿勢が，子どもへの積極的な関わりや語彙の付与を通して，幼児期の子どもの語彙能力や感情理解の発達を促進することを示した（篠原，2011;2013）。乳児の心的状態を想像するという養育者の特徴を検討することは，養育行動の実践や，子どもの発達への連続性から重要な課題であると考える。

２．研究の目的

母親が発達早期の乳児の心的状態に目を向ける傾向は，子どもへの養育行動や子どもの社会情緒的発達への影響という点から注目されている。ただし現在まで，母親が乳児の心的状態を想像することの「個人差」を規定する要因を探る実証的検討は十分に行われていない。例えば，母親の厳しい生活環境，被養育経験，子ども側の発達的問題が，母親による乳児の心的状態の解釈に関連するといった臨床的考察は散見され（Sharp et al.,2007），そうした要因が影響している可能性は考えられる。ただ一方で，篠原（2003）では臨床群ではない母親達を対象に乳児刺激からの心的状態の読み込みの特徴を測定し，母親の育児に関する経験，生活環境，個人的特性等との関連を予備的に検討したところ，明確な関連は認めらなかった。

そこで本研究では，母親が乳児の心的状態を想像的に読み込む姿の個人差には，いかなる要因が影響しているのかを検討することを目的とした。特に，乳児の行動場面に触れたその際に，母親が能動的に乳児の何に注目し，場面から如何なる情報を得ようとするかという特徴はこれまで検討に付されていない。先行研究で検討されてきた母親の経験や養育信念というよりも，子どもを「見る」という実際の場面で母親の視線に注目し，どのような情報探索の特徴が，乳児の心的状態の読み取りに関連しているのかを検討することを目的とした。

また，母親が乳児の心的状態に目を向ける傾向については，主にアタッチメントに関する研究領域で検討されており，子どもの安定したアタッチメントの発達の促進因として注目されている。本研究では，母親が乳児の心的状態に目を向ける傾向と，母親自身のアタッチメントスタイル（内的作業モデル）との関連を探り，読み込みの個人差の規定因について知見を得ることとした。さらに，母親が乳児の心的状態を豊かに読み込むことが，子どもの安定したアタッチメントの発達に寄与するのかも検討することとした。

３．研究の方法

（１）研究計画と研究協力者

本研究の開始当初においては，生後半年前後の乳児とその母親を対象として，母親による乳児の心的状態の読み取りの実験と視線情報の計測を行い，また，その母子を約 1 年後に追跡調査することによって子どものアタッチメント安定性を測定することを計画していた。しかし，研究期間中に研究の中断が生じたため，協力を依頼する乳児の月齢の幅を広くするとともに，当初計画していた母子の追跡調査は一部のみの実施となった。1 時点目で研究協力を得た母子は，生後 4～18 ヵ月の乳児とその母親 66 組であった。乳児の心的状態を読み取る際の視覚的情報探索の特徴については，養育者以外の成人にも幅広く研究協力を依頼して実験データを得た。

（２）乳児の心的状態の読み取りと視覚的情報探索の特徴についての検討
①研究協力者
生後 5～12 ヵ月の乳児を育てる母親 50 名について実験データを得た。これに加えて養育経験を持たない母親以外の成人にも協力を依頼した。成人 33 名が実験に参加し，30 名について分析可能なデータを取得した。成人について男性が 11 名，女性が 19 名であり，平均年齢は 27.3 歳（19 歳～44 歳）であった。

②実験の手続き
実験協力者を個別に実験室に招き，乳児のビデオ刺激を視線計測装置（Tobii T120）のモニタに呈示して以下の実験を行った。
筆者がこれまでに開発している，母親が乳児の行動に対して心的状態の存在を想像して読み込む傾向（mind-mindedness：以下 MM）を測定する実験 （篠原，2006）を応用して行った。MM 測定実験では，乳児の日常的な行動を収めたビデオ刺激（各 30 秒程度）7 つを共通刺激として使用した。各ビデオ刺激の呈示後，ビデオに登場した乳児が何らかの心的状態を有していると思うかを質問して口頭での自由回答を求めた。ビデオ刺激は，途中に一時停止場面が設定してあり，その特定の場面における乳児の心的状態を回答するように求めた。実際の教示においては「ビデオの乳児は何か思ったり，考えたり，感じたりしていると思いますか」と質問し，乳児の心的状態について複数思い浮かぶ場合にはその全てを回答するように，また，乳児が何も心的状態を伴わないと考えられた場合にはその旨を回答するように求めた。

③得点化
MM 測定実験における協力者の回答は全て録音され，逐語録を作成した。乳児の心的状態に関して「欲求」，「感情」「思考認知」「意図」「好み」に該当する言及があった数をカウントした。一方，乳児の行動を単純に描写する回答（腕を伸ばして触っている）など，心的状態に触れていない回答はカウントの対象から除外した。各ビデオ刺激に対する心的状態への回答数を MM 得点とした。

④視線情報の分析
各ビデオ刺激に設定された一時停止場面について，興味領域（AOI）を設定して実験参加者がビデオ刺激内のどの部分を注視しているかを分析した。なお，MM 測定実験で用いた 7 つのビデオ刺激について，分析対象とする一時停止場面の特徴を可能な限り等質にするため，画面内に乳児が一人で登場し，玩具で遊んだり事物を見たりしている 3 つの刺激への回答場面を分析の対象とした。本研究では探索的な分析を行うために，AOI は 3 つのビデオ刺激に共通して「乳児の顔（目，鼻，口を含む）」「乳児の腕・手」「乳児の身体（腕・手以外の部分）」と大きく 3 つの領域に設定した。3 つのビデオ刺激の各 AOI への平均注視時間を算出した。

（３）母親の内的作業モデルの測定
乳児に対して心的状態を想像的に解釈し読み取る傾向について，その個人差の規定因を多角的に探るべく，MM実験に協力した乳児の母親を対象に，内的作業モデルを質問紙により測定した。この分析の対象となったのは，生後 6～11 カ月の乳児の母親 48 名（乳児について男児 21 名，女児 27 名，第 1 子 32 名，第 2 子以降 14 名，不明 2 名）であった。
母親にはMM測定実験実施時に質問紙を配布し，ECR-GO 尺度（中尾・加藤，2004）の計 30 項目（7 件法）への回答を求め，郵送にて提出を依頼した。見捨てられ不安得点（18 項目の平均値：不安得点）と，親密性の回避得点（12 項目の平均値：回避得点）を算出した。MM測定実験における乳児の心的状態に関する回答との関連を検討した。

（４）乳児のアタッチメント安定性の測定
上記（１）における MM 測定実験に参加した母親とその子どもである乳児を，約１年後に再度，実験室に招き，追跡調査を行った。MM 測定実験の後，研究を中断したため，この追跡調査が可能であった母子は 16 組であった。これらの母子について，1 時点目の乳児の平均月齢は 9.13 ヵ月（レンジ生後 6～18 カ月）であり，2 時点目の乳児の平均月齢は 17.06 ヵ月（レンジ生後 15～23 カ月）であった。
2 時点目の調査において，母親を対象に日ごろの子どもの行動の様子や特徴を尋ねながら実施する Attachment Q-Sort（Waters,1995）により，子どもが母親との間に形成しているアタッチメントの安定性を測定した。最もアタッチメント安定性が高いと仮定される子どもの姿として専門家に想定された標準分類との相関値を求め，調査協力が得られた各乳児のアタッチメント得点を算出した。

４．研究成果
（１）乳児の心的状態の読み取りと視覚的情報探索の特徴についての検討
①分析結果
本報告書では，養育経験を持たない成人から得たデータを分析した結果を報告する。3 つの乳児刺激に対する MM 得点の平均は 1.32 点（SD=0.54）であった。また，MM の下位得点として，

心的状態の内容別にカウントしたところ，「欲求」は平均 0.39 点（SD=0.40），「感情」平均 0.49 点（SD=0.43），「思考認知」平均 0.41 点（SD=0.36）であった。

乳児刺激の各 AOI への注視時間について，「乳児の顔」は平均 1.32s（SD=0.65）「乳児の腕・手」は平均 0.66s（SD=0.47）「乳児の身体」は平均 0.18s（SD= 0.19）であった。MM 得点と各 AOI への注視時間については，有意な関連は認められなかった。そこで，MM の下位得点ごとに関連を検討すると，乳児の「感情」に関する回答数と，「乳児の身体」に対する平均注視時間との間に有意な相関が認められた（r=.42，p=.02）。乳児の顔や手への平均注視時間との間には相関は認められなかった。

②考察

MM測定実験に協力した成人全体の特徴として，ビデオ刺激となった乳児の「顔」や「腕・手」部分への平均注視時間が長かった。顕著かつ動きの大きい情報源となる顔や手に注視することには実験協力者間における差異が出にくいと考えられた。一方で分析結果からは，乳児の「顔」や「手」以外の身体部分に対する注視時間の長さが，乳児の喜びや楽しさといった感情の読み取りの多さと関係していることが示された。Aviezer（2012）は，成人の刺激を用いた研究ではあるが，同じ表情を浮かべていても身体の動きが異なる場合，感情の内容が異なって解釈されることを示している。本研究においても実験協力者が乳児の身体部分の動きや情報を感情の読み取りに活用している可能性が考えられた。ただし，身体領域から固有の情報を得るというのみならず，顔や手の動きといった感情価が比較的明確に表れる部分以外にも幅広く視線を巡らせようとする情報探索の特徴を持つことが，乳児により豊かな感情の存在を想定する姿勢と関係しているのではないかとも考えられた。

（２）母親の内的作業モデルと乳児刺激へのMMとの関連

①分析結果

7 つの乳児刺激に対する母親のMM得点の合計は，平均 16.76 回（SD=6.42），「感情」の合計は平均 5.83 回（SD=3.96），欲求の平均は 4.02 回（SD=2.97），「思考認知」の平均は 5.24 回（SD=3.74）であった。母親の内的作業モデルに関して，見捨てられ不安得点は平均 2.76 点（SD=1.07），親密性の回避得点は平均 3.56 点（SD=1.09）であった。内的作業モデルに関する両得点の平均値は，母親を対象とした先行研究における平均値と近似したものであった。

MMの合計得点ならびに下位得点を目的変数，母親自身の子どもである乳児の性別と出生順位（第１子かそれ以降か）をステップ 1，母親の内的作業モデルをステップ 2 の説明変数とする階層的重回帰分析を行った。その結果，MM合計得点には有意な影響が無かったが，母親の「見捨てられ不安」の得点が高いほど，乳児から感情状態を読み取ることが少なく（β=−.421, p<.01）），同時に一方では，思考や認知状態を読み取ることが多い傾向（β=.460 , p<.10）が見いだされた。親密性の回避得点については有意な影響は認められなかった。

②考察

先行研究より，母親自身が持つアタッチメントの個人差によって情動認知にバイアスがあることが指摘され，子どもの感情の認知や読み取りに影響していること等が報告されている(Oppenheim et al.,2001;松田,2015)。本研究においても，母親の内的作業モデルによる乳児刺激に対するMMへの影響が示唆された。「見捨てられ不安」の高さは，一般的には当人にとって脅威となりうるような情報に敏感に反応することを促すと予想されるが，今回の分析結果からは，乳児の喜怒哀楽といった感情状態について自発的，直接的に焦点化して言語的に評価することを避けることがうかがわれ，乳児の感情状態に対する防衛的姿勢に表れる可能性が示唆された。しかし一方で，不安の高さが一つの理由となって，ビデオ刺激の中の乳児が何を考え，何を期待し予想しているのかといった，思考認知状態については詳細に思案しようとする姿を促進している可能性が考えられた。なお，親密性の回避得点についてはMMとの直接的関係が見いだされなかった。「回避」という傾向は，より無意識的，自動的な情報処理に影響するという指摘があり，本研究における意識的な口頭回答には影響を及ぼしにくかったのではないかと考えられた。

（３）乳児のアタッチメントの発達と母親のMMとの関連

①分析結果

アタッチメント安定性の測定対象となった 16 名の乳児について，アタッチメント得点の平均は 0.39（SD=0.16）であり，レンジは 0.07 から 0.56 であった。アタッチメント得点について，安定性の一つの目安とみなされる 0.30 以上の得点となったのが 12 名，0.30 より低い得点であったのが 4 名であった。調査 1 時点目に母親を対象に実施したMM測定実験における，MM得点との相関係数は r_s=.218（p=0.42）であり，有意な相関関係は認められなかった。

②考察

2 時点での調査を実施できた母子数が少なく，さらに調査１時点目における対象乳児の月齢のレンジも幅広いことなどから，母親のMMという特徴が，その後の子どものアタッチメント安定性に及ぼす影響について十分な分析を行うことはできなかった。先行研究においては，乳児が生

後半年の時点で測定された母親のMMの高さが，子どもが 1 歳になった際の安定したアタッチメントを予測することが報告されている(Meins et al.,2001)。今後，調査実施時の乳児の月齢を揃えつつ，より多くの母子に対する追跡調査を実施するなどして，日本における母親のMMと子どものアタッチメントの発達の関連についての知見を得ることが課題である。

（4）今後の展望

本研究では，母親が幼い乳児に対して心的状態を帰属する傾向であるMMに着目し，その個人差の規定因として，乳児ビデオ刺激を視聴する際の視覚的情報探索行動の特徴，および，母親自身が持つアタッチメント（内的作業モデル）の特徴に着目して分析を行った。

本報告では，乳児に心的状態を帰属するMMと視覚的情報探索行動の特徴の関連について，養育経験を持たない成人についての分析結果を示した。今回得られた，乳児の顔，腕・手，身体部分への注視との関連の分析結果を踏まえつつ，今後，乳児の養育を行っている母親から得られたデータについても分析を行い，知見を得たいと考える。その際，母親自身が育てている乳児の月齢，性別，出生順位などによる影響についても検討を行う必要があると考える。

また，今回の分析からは，母親自身が持つアタッチメントスタイルに関して，内的作業モデルの「見捨てられ不安」の高さによる，乳児の感情状態および思考認知状態の読み取りへの影響が認められた。今後，こうした母親自身がもつ養育歴等が反映された個人特徴と，乳児という刺激に触れたその際の情報探索行動，さらには，現在の母親を巡る家庭環境や育児環境などの環境要因を複数組み合わせ，乳児の心的状態に対する母親の帰属傾向や読み取りの内容への影響を多角的に分析することが課題である。

最後に，より多くの調査協力者を対象とした確実な追跡調査の実施により，子どもの安定したアタッチメントの発達に肯定的影響を持ちうる養育者の特徴，そして，養育行動の特徴を検討することが今後の最大の課題である。親支援や子育て支援にも有益となるような，基礎研究の知見を蓄積することを目標としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 篠原郁子	４．巻 153
２．論文標題 アタッチメントと非認知的な心の発達 ： 対人関係、自己や他者の理解と認識	５．発行年 2018年
３．雑誌名 発達（特集：最新・アタッチメントからみる発達）	６．最初と最後の頁 10‐16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 篠原郁子	４．巻 22（2）
２．論文標題 大人の上手な子どもへのかかわり	５．発行年 2019年
３．雑誌名 チャイルドヘルス	６．最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 篠原郁子	４．巻 64
２．論文標題 アタッチメントと親子やりとり――子どもの心を考える	５．発行年 2016年
３．雑誌名 教育と医学	６．最初と最後の頁 22－29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 篠原郁子	４．巻 58
２．論文標題 Sensitivityの派生概念と子どもの社会的発達―アタッチメント研究からの展望―	５．発行年 2015年
３．雑誌名 心理学評論	６．最初と最後の頁 506-529
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.24602/sjpr.58.4_506	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 篠原郁子・金重利典・石橋美香子・小山悠里
2．発表標題 母親の内的作業モデルと乳児の心的状態の読み取りの関連
3．学会等名 日本赤ちゃん学会第19回学術集会
4．発表年 2019年

1．発表者名 篠原郁子
2．発表標題 発達早期の養育特徴の多角的検討と子どもの社会的発達
3．学会等名 日本発達心理学会第30回大会（関連団体企画シンポジウム「自閉症支援において親子の関係性の何を支援すべきか？」話題提供）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Ikuko SHINOHARA & Yusuke MORIGUCHI
2．発表標題 How do adults look at infants’ behaviors to know infant’s feelings and thoughts? ： An eye tracking study.
3．学会等名 25th Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development
4．発表年 2018年

1．発表者名 篠原郁子
2．発表標題 母親による子どもの内的世界への注目と子どもの社会的発達
3．学会等名 日本発達心理学会第26回大会（自主シンポジウム 「乳幼児期の他者理解の発達」話題提供）
4．発表年 2015年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考